日向国と『古事記』・『日本書紀』

※古事記編さん一三〇〇年記念関連講演会録

講師　ラ・サール学園
永山修一

目　次

はじめに
『古事記』とは
『日本書紀』とは
1　記紀神話　海幸山幸神話の中の「隼人」
2　伝承の中の日向
3　江戸時代の日向と神話
4　近代の宮崎県と記紀神話
5　日本神話のとらえ方
おわりに

本稿は、平成二十四年十月十三日（土）に実施された、『古事記』編さん一三〇〇年・西都原古墳群発掘一〇〇年記念「考古学から東アジアを考える」関連講演会（主催、宮崎県教職員互助会、NPO法人iさいと、共催、宮崎県立図書館）の内容に加筆・修正したものである。

はじめに

ただ今ご紹介頂きました永山です。今年の二月にみやざき歴史文化館にて同様の話をしたところです。今回は、その時の話にいくつかの内容を付け加えた形でお話ししたいと思います。

まず今年は『古事記』編纂一三〇〇年ということで、先日、新聞に『古事記』の編者である太安万侶の墓誌に関する記事がありました。今から三〇数年前に太安万侶のお墓が奈良県で見つかりました。これには火葬した骨を治めた木の箱と、その下には死亡した場所が書かれた銅板製の墓誌が納められておりました。奈良県でも『古事記』編纂一三〇〇年に向けていろいろな事業を行っているとのことですが、あらためてその墓誌を調査したところ、銅の板に鑿（たがね）で文字が刻んであり、そのすぐ横には墨でも同じ文字が書いてあったということです。発見されて三十数年ぶりに再調査の結果、墨書の存在もわかったということです。これは奈良県の記紀万葉プロジェクトの研究成果の一環として発表されたものです。それから島根県では、やはり『古事記』編纂一三〇〇年で盛り上がっているようでして、京都国立博物館で「大出雲展」というかなり大がかりな特別展を実施しております。

宮崎県はというと、今年になって本格的に『古事記』編纂一三〇〇年ということでプロジェクトを立ち上げ、現在進行中ということです。宮崎県の場合には『古事記』編纂一三〇〇年に加えて、西都原古墳群発掘一〇〇年にも当たり、プラス八年後の二〇二〇年の『日本書紀』編纂一三〇〇年に当たる年まで、このプロジェクトを続けていくと聞いております。

今日の話は、『古事記』、『日本書紀』に日向国がどのようにでてくるかということ、主に神話の部分と伝承の部分に出てくるわけですが、その内容をご紹介すると同時に、現在でも宮崎は神話のふるさとと言われている訳ですが、それはどのような意味合いをもってきたのか、ということについて見ていくことにします。古代の話ではあるが、近代以降にどのように理解されてきたかという二重構造で少々分かりにくい内容になるかと思いますがご容赦ください。

『古事記』とは

まず、『古事記』と『日本書紀』についてごく簡単にお話しします。現在、この県立図書館の特別展示室において『古事記』と『日本書紀』について展示していますが、そこには『古事記』や『日本書紀』の江戸時代の木版刷りのものが展示されており、解説もされていますので、後ほどぜひご覧いただければと思います。

『古事記』は天武天皇の命令で稗田阿礼が暗唱していたものを、元明天皇の命で太安万侶という人物が文字に書き移したものだといわれています。完成したのが和銅五年（七一二年）ということで、今年がそれからちょうど一三〇〇年にあたります。『古事記』は上巻・中巻・下巻の三巻からなっています。上巻はアメノミナカヌシからウガヤフキアヘズまで、中巻はウガヤフキアヘズの子どもにあたるカムヤマトイワレヒコ、初代の神武天皇にあたりますが、そこからホムダ（応神）天皇まで、下巻がオホササギ（仁徳）天皇からオハリダ（推古）天皇まで、という三巻からなっております。推古天皇が亡くなるのが西暦六二〇年代ですので、『古事記』はそのあたりまでをカバーしているということになりま

す。日本の古代史を考える上では「大化の改新」という中大兄皇子らが起こした政変、古代最大の内乱である「壬申の乱」、その後の律令国家の形成過程が重要ですが、『古事記』はその部分は扱っておらず、その前で終わっています。(『古事記』の写本画像を提示しながら)右側は『古事記』の写本になります。左側が『古事記伝』と言いまして、本居宣長が著したものです。この『古事記伝』の最も古い部類にあたる刊本が、展示されていますのでこちらもぜひご覧ください。本居宣長という人物は、国学と呼ばれる日本の古典を調べる学問を完成させた人物として知られております。これは(『古事記伝』画像)色々と書き込みがされているようですので、宣長による原稿本であることがわかります。

日本書紀とは

次に『日本書紀』ですが、これは舎人親王を中心に編纂されたものです。その編纂事業は『古事記』と同じく天武天皇の時代に始まっていたようですけれども、完成したのは七二〇年です。『日本書紀』は三〇巻と系図一巻からなっておりまして、持統天皇の時代までが収載されます。つまり七世紀の終わり頃までが範囲となっておりまして、「大化の改新」や「壬申の乱」、「大宝律令」ができる少し前までの内容が含まれています。『日本書紀』以降、『続日本紀』、『日本後紀』、『続日本後紀』、『日本文徳天皇実録』、『日本三代実録』という政府の責任のもとに六つの歴史書(六国史)が編纂され、この歴史書で、九世紀の終わり頃までがカバーできるということになります。(画像を示しながら)これは『日本書紀』の古い写本です。『古事記』と『日本書紀』の違いを一言で申し上げるとすれば、『古事記』はなるべく当時の日本語を文字に移してあらわしたもの、それに対して『日本書紀』は、日本が東アジアの世界の中で中国に対して自らを位置づけようという意図のもとに、中国人にも読んでもらえるようにほぼ純粋な漢文を使って書かれているものです。内容的には似た部分も多いですが、描き方については異なる部分も多いのです。

さて、『古事記』、『日本書紀』の内容についてですが、神話は歴史的事実ではありません。では神話はなぜ作られたか、何故に『古事記』や『日本書紀』に神話が記されていくかということを考えれば、その編纂意図に大きく制約されているだろうということが言えます。

それから六世紀以前の史料については、一部、歴史的事実を反映した部分がありますが、かなり慎重な吟味をしていかなくてはならないと言えます。これを歴史学では史料批判といいます。書いてあることが全部本当とは限らないということは、例えば犯罪捜査についても、証言の信憑性をそれぞれ確認した上で信用できるものを採用することが必要であることと同じであり、史料においても信用性を吟味する必要があるということです。

七世紀以降の史料については、史料批判が必要であるが、その内容は大体信用できると考えられています。ですから『古事記』、『日本書紀』を考えていく上では、それぞれの内容ごとに扱いを変えていく必要があるということが言えそうです。

さて、今から一四年前、宮崎県は『宮崎県史』を完成させました。一六年かけて二〇〇〇年に完成したわけですが、今日のお話の内容は『通史編　古代2』で扱っています。その叙述の仕方が単純に古いものから新しいものへということであれば、神話から伝承、七世紀以降となるわけですが、先ほど述べたように信用性で言いますと、七世紀以降のものが最も信用できる、そして神話がその時代にまとめられたものであるということから、①七世紀以降の史料、②神話、③六世紀以前の史料、の順で叙述しました。これについては、古い→新しいという歴史の流れからすると、このような新しい内容から先に述べて遡る方法については違和感があるとの批判も受けました。しかし、事実としての確実さを重視して、七世紀以降の史料、六世紀以降の史料、神話の順で記述していきました。

1　記紀神話　海幸山幸神話の中の「隼人」

本日は、神話、伝承についてのお話しをしていきますが、最初に海幸彦、山幸彦の神話を採りあげたいと思います。ご存じの通り、天孫降臨の後、ホノニニギが吾田という場所でオオヤマツミノカミの娘カムアタツヒメと結婚して、その間に 海幸彦と山幸彦が生まれます。海幸彦が兄、山幸彦が弟ですが、それぞれの道具を交換して、弟の山幸彦が兄の海幸彦の釣り針を失い、その釣り針を求めて海の神のもとに出かけ釣り針を得て元の世界に戻って来ます。その際にワタツミノカミからシオミツタマ、シオヒルタマという二つの玉を与えられ、兄を懲らしめていく、それで兄は弟に対して子々孫々まで服従することを誓う、という内容になっています。

この後、山幸彦はワダツミノカミの娘、トヨタマヒメと結婚してウカヤフキアヘズノミコトが生まれ、その子どもがカムヤマトイハレヒコで、東遷してヤマトで即位して神武天皇となる、という流れになります。

ここで、七世紀頃の日向について一例をあげると、『日本書紀』において推古天皇が有力な臣下を招いて宴を催した時に、蘇我馬子が寿歌を奉り、天皇がそれに対して歌を返していますが、その際に、「馬ならば日向の駒」という歌詞が出てきます。馬ならば日向の駒が有名であるということですが、ちょうどこの頃の日向に、馬がいたことが考古学的な資料で確認されております。（壁画画像を提示しながら）一九八〇年に調査されました、現宮崎市佐土原町にあたるバイパス工事の事前調査で発掘された「土器田東一号」という装飾横穴墓です。古墳の壁面に馬の姿が線刻で描かれています。これが六世紀後半から七世紀始めのもので、ちょうど推古天皇が歌った時期の古墳にあたるということですので、日向の話が確実に都まで届いていたことがわかる訳です。（木簡画像を提示）またこれは奈良時代のものですが、「日向国牛皮四枚」と記述された木簡が平城京から出ており、日向では牛も飼われていまして、牛の皮が都まで運ばれていたことがわかります。

さて『古事記』や『日本書紀』によれば、隼人とは海幸彦の子孫であり、海幸彦は山幸彦に子々孫々までの服属を誓いますが、その子孫も服属をするということになります。以下、隼人の問題について見ていきます。

隼人はご存じの通り南九州に住む人々でありますが、彼らが本格的に大和政権とコンタクトを持つのは、六八二年（天武十一）の記事からで、おそらくはこの頃が最初ではないかと考えられています。『日本書紀』同年七月甲午条によれば、「隼人多く来たり、方物を貢ず。是日、大隅隼人、阿多隼人と朝廷に相撲す。大隅隼人勝つ。」とあり、隼人は大隅隼人と阿多隼人に分けられ、両者は貢ぎ物を献上し、朝廷で相撲をとりました。その二〇日余り後の同月戊午条には「隼人等を明日香寺の西に饗す。種々楽を発す。仍りて禄を賜ふこと各差有り。道俗悉く之を見る。」という記事があります。朝廷が明日香寺の西で、隼人をもてなしたということですが、（写真を提示しながら）現在の明日香寺の西というのは、このような所になります。正面にあるのが甘橿丘です、中央の石塔が入鹿の首塚と言いまして、大化の改新のクーデターで切られた蘇我入鹿の首がここまで飛んできたといわれるものです。写真の手前が飛鳥寺ですので飛鳥寺の西に甘橿丘があり、その間の広場で隼人をもてなしたということになるのですが、この場所は、大化の改新の後中心メンバーが盟約を結ぶなど、国家的な重要行事が行われる場所でもあったわけです。ですから隼人をもてなすということは、政府にとって大変重要な意味のある出来事であったということが言えます。その背景は次のように考えられます。六六三年、倭国が百済を救援するための白村江の戦いに敗れまして、大変厳しい状況になります。その中で天皇を中心とする強力な国家体制を造ろうとしました。天皇の力を見せつけるために、一つには遠くに住む野蛮な人々が天皇を慕ってやって来るというあり方、これは中国でも二〇〇〇年以上前からそのような仕組みがあったわけですが、日本でも同じような仕組みを作り上げた

いと考えたようです。そこで南に設定されたのが「隼人」、東北に設定されたのが「蝦夷」であり、当時の都人から見れば「野蛮」な人々がはるばる貢ぎ物を持ってくることが、天皇の力強さを印象づける上で大変重要なものだと考えたわけです。せっかくのイベントですので、「道俗悉く之を見る」と史料にもありましたように、多くの人にその様子を見せることが極めて大事であったということになるわけです。

（西都原考古博物館の展示画像を提示しながら）これは西都原の考古博物館にあります隼人の盾の複製です。この隼人の盾は平城京の井戸に使われていました。これは当時の政府が隼人に対して抱いていたイメージとも関わりがあるのですが、どうも特別なまじないの力といいますか、マジカルな力を持っていると考えていたようです。ですから、井戸はそこに毒などを投げ込まれると多くの人々が亡くなり、あるいはそこから病気が拡がる訳ですから、そうならないように特別な力を持った人々が用いる盾を井戸の枠組みに使っていたということです。それから、七二九年に謀反の疑いを掛けられて殺されてしまう左大臣長屋王という人物がいますが、その屋敷から出てきた木簡に、「隼人二人」とありますので、隼人が長屋王家に出入りしていたということが分かります。

さて、その隼人ですが、結論から申しますと、貢ぎ物を持ってくるようになる七世紀の後半に「隼人」という名前もできたのではないかと考えられるのです。その理由を簡単に申し上げます。『古事記』や『日本書紀』に出てくる「蝦夷（えみし）」や「熊襲（くまそ）」といった人々は、表記の仕方にたくさんの種類があります。熊襲には一〇種類以上あります。蝦夷も同様です。これはなぜかというと、エミシやクマソという言葉が先にありそれに漢字を当てる際にいろいろな漢字の当て方がある訳です。ところが隼人については、万葉集に一例だけ、「早人」とあるのみで、他はすべて「隼人」という書き方で統一されています。例えば地名については政府が命令を出すまではバラバラでしたが、政府がこの文字で表記するようにという命令を出すと統一された表記になっていくことが知られています。つまり、「隼人」というのは政府の命令によって文字の書き方まで決められた上で使われるようになった名前ではないかと考えられるわけです。もう一つそれを証拠づけるものとして、人名使用の問題があります。「熊襲」というのは人名での使用例は確認されていないのですが、「蝦夷」は人の名前として数多く使用されています。有名なところでは、大化の改新の時に滅ぼされる蘇我蝦夷という人物がおりますが、他に人名に三〇名近く確認されています。蘇我蝦夷は七世紀前半の人ですから、おそらくは六世紀ごろから使われていたであろうと考えられます。ところが「隼人」という人名を持つ人は、三名しか確認できず、いずれも八世紀半ば、奈良時代しか見られないということですので、七世紀の後期ぐらいに「隼人」という言葉が初めて使われるようになり、それが人名に使われるようになったのは更に遅れてからではないか、という見方ができると思います。そのように考えますと、隼人は六七〇年代から八〇年代に初めて登場し、朝廷はそれ以前に南九州と関わりを持っていた人々との関係をいったん棚上げした上で、南九州に住んでいた人々を隼人と呼び、貢ぎ物を持ってこさせる、ということになります。

さて、隼人と政府は何度か軍事的な衝突をしています。かいつまんで申し上げますと、文武三年（六九九）には政府が派遣した調査団が、南九州の人々によって襲撃されるという事件が起こっています。『続日本紀』文武四年六月庚辰条に「竺志惣領（つくしのそうりょう）に勅して、犯に准じて決罰せしむ・・」とあります。「竺志惣領」とは、後の大宰府の長官で、これに命じて処罰させた、ということです。

次に大宝二年（七〇二）ですが、『続日本紀』同年八月丙申条に、「薩摩と多禰（たね）、化（け）を隔て命に逆ふ。是に於て兵を発し征討す。遂に戸を校し吏を置く。」とあります。薩摩と多禰が、命令に従わなかったために征討軍を送ってこれを鎮圧したということですが、その「戸を校し」とは戸籍作り、「吏を置く」とは、国司や郡司を置くということであり、この前年、大宝律令が制定されまして、今までの政治の仕組みが新たな

段階に入っていきます。七〇二年は、その大宝律令に基づいて戸籍をつくる年になっていました。それで、戸籍作りのために南九州の「反乱」を鎮圧した上で、戸籍作りや令制国の設定を行ったということがこの記事になると思われますが、それが一〇〇%すぐに実現したわけではないようです。この時、薩摩国と多褹嶋という行政機関が置かれました。（画像より）これは薩摩半島南の阿多と呼ばれる場所になります。万之瀬川という川が流れておりまして、下流にかなり広い平野が広がっています。ここが隼人の中でも阿多隼人と呼ばれる人々の根拠地であると考えられます。なお、「反乱」とは政府側からの見方であり、隼人は、律令制を押しつけてくる政府に「抵抗」していると言えます。ここでは、隼人の「反乱」ではなく、隼人の戦いと言っておきます。

続いて和銅六年（七一三）の隼人の戦いです。『古事記』大八島国生成条によれば九州には元々は大きく四つの地域があったようです。肥、豊、筑紫、熊襲の四国です。後に、筑紫国は筑前・筑後、豊国は豊前・豊後、肥国は肥前・肥後にと、それぞれ前後に分けられて六国になります。残った部分は今の宮崎県と鹿児島県です。ですから、九州は現在の宮崎・鹿児島方面と大分方面、福岡・佐賀方面と、長崎・熊本方面という大きく四つの地域に分けられていました。先ほど述べたように七〇二年に鹿児島県の西側の薩摩半島の部分が薩摩国として分立し、七一三年に、日向国肝坏、曽於、大隅、姶羅の四郡を割いて、大隅国を建てるということですから、日向国の中から大隅国を分けていったということになります。おそらくこれは広大な日向国の中から隼人が住んでいた場所を分けていくという意味を持っていたと思われます。このときにも戦いが起こっております。『続日本紀』和銅六年七月丙寅条に、「今、隼賊を討つ将軍・・」とありまして、隼人を討った将軍以下の一二八〇人余に褒美を与えるという記事があります。それから翌七一四年、『続日本紀』和銅七年三月壬寅条に、「隼人、昏く荒く野心にして、未だ憲法を習はず、因りて豊前国の民二百戸を移して、相勧め導かしむるなり。」とあります。つまり、隼人は乱暴であり野蛮であるから、豊前国の人々をそこへ移して教え導こうということが行われるわけです。大隅国の桑原郡という郡の中には、大分郷という郷があります。これは豊後国の大分郡から移民を行ったということです。それから豊国郷があります。これは豊前国と関係のある郷名です。また、薩摩国でも現在の薩摩川内市に高城郡という郡がありますが、そこには合志、飽田、宇土、託麻という四つの郷があり、これはいずれも肥後国の郡名に一致しています。したがって薩摩半島には肥後国から、大隅国には豊前国や豊後国から移民をして隼人を導かせたということになります。

最大の戦いと言いますと養老四（七二〇）年になりますが、この時には政府は一万人以上の兵を投入しています。当時の日本の人口が五百万人前後と言われていますから、五百万人分の一万人、単純に現在の人口構成に直しますと、二十四万の兵を南九州に送り込むという、とてつもない規模の軍事行動をとったという事になります。一年半近くかけてようやく隼人を鎮圧します。（画像を提示しながら）これは現在の霧島市国分にあります隼人塚です。後ろに見えているのは、養老四年の隼人の戦いの時に、隼人の人々が立て籠もったとされている姫城という山城ですが、今は「ひめぎ」と呼ばれています。このようにして隼人はしばしば政府と戦っていたわけです。

さて先程、隼人は六七〇年以降に登場すると申し上げましたが、神話にも隼人は出てきます。そうすると、このような記事をどう理解すればいいのかということが問題になります。まず、六八二年以前の隼人関係の記事で神話以外の記事を見てみますと、清寧天皇や欽明天皇、斉明天皇などの時代に、隼人が出てきます。これはいずれも蝦夷と隼人という、天皇の力を見せつける舞台装置とでも言うべき人々がセットで出てくるということが特徴です。この記事につきましては、今年の三月まで宮崎県埋蔵文化財センターにいらした原口耕一郎さんが、『日本書紀』などの文章が中国のどの書物を手本にして書かれているの

かという「出典論」の研究をされ、例えば清寧天皇の記事は『隋書』から、欽明天皇の時代の記事は、唐の太宗貞観年間の『冊府元亀』から、斉明天皇の時代の記事は『後漢書』からそれぞれとられているといったことを指摘しています。いずれも中国の古典を使っており、その一部を「蝦夷」「隼人」と書き換えているわけですから、これらはそのまま事実として信用するのは難しいであろうとしています。

それから、先程挙げました海幸山幸神話につきましては、二〇年ほど前、瀬間正之さんが同じような研究をされていまして、海幸山幸の神話とそっくりの話が、中国の梁の時代に作られた仏教の説話集『経律異相』にあるということを指摘しています。これは話の中身が似ているというだけではなく、特徴的な文字そのものが使われているということですので、『古事記』をまとめた太安万侶が、『経律異相』という本を必ず見ていたはずであり、その内容を参考にしながら海幸山幸の神話をまとめていったのではないか、と言われています。こうしたことからも天武以前の内容をそのまま歴史的事実と見ることはできないと言えそうです。

海幸山幸の神話がまとめられた目的ですが、国文学者の吉井巌さんは、海幸山幸神話で一番大切なのは、隼人が天皇家に服属する理由を説くことにあったとされています。『古事記』、『日本書紀』というのは天武天皇の時代からまとめられはじめます。そして『古事記』は完成するのが七一二年、『日本書紀』が完成するのが七二〇年です。ちょうどこの時期、政府は隼人たちに貢ぎ物を持ってこさせますが、その一方でしばしば反抗されているわけです。それで神話に遡って、隼人たちはヤマトの政府に服従することを誓うという神話を使い、服属の由来を説くということが、海幸山幸神話の最も重要なポイントではないか、と吉井氏は言われるのです。

これを前提に考えると、『古事記』の神話と『日本書紀』の神話の微妙な違いに興味を引かれます。海幸山幸の神話で見ると、『古事記』では、海幸彦は阿多隼人の祖であると書いてあります。これは七〇二年、政府が戦ったのは薩摩と多褹で、薩摩半島は阿多隼人が住んでいたので、阿多隼人の祖であるということです。ところが、政府は七一三年に大隅の隼人とも戦います。その後できた『日本書紀』には、「海幸彦は隼人等の始祖である」つまり、阿多隼人の始祖とは言っておらず、大隅、阿多両方併せた隼人の始祖であると言っています。『古事記』の段階では隼人の中でも特に阿多隼人の服属を説けば良かったので、海幸彦は阿多隼人の祖であれば良かった。それが大隅隼人とも戦争をした後、七二〇年の『日本書紀』の段階では、海幸彦は、薩摩・大隅両方の隼人の祖である、と神話の内容が微妙に変化してきます。このあたりから神話が、それを産み出した時代やその時の政治的、社会的状況を密接に反映していることが分かります。

この海幸山幸神話のもう一つの重要なポイントが、天皇支配の正当性及びその根拠を与えるものということが言えます。日向神話には天孫降臨から神武天皇東遷までがまとめられており、アマテラスがホノニニギに天孫降臨を命じ、ホノニニギはアマテラスから天上世界の支配権を受け継いで、地上に降りてきます。ホノニニギはオオヤマツミの娘と結婚します。オオヤマツミは地上世界の支配者ですから、その間に生まれたホデリ、ホスセリ、ホヲリは、父親から天上世界の支配権、母親から地上世界の支配権を受け継ぐわけです。山幸彦は海の神の娘と結婚し、その間に生まれたウガヤフキアヘズは、母方から海の支配権を継承する。結局、ウガヤフキアヘズの子である神武天皇は、天上世界、地上世界、海の世界、つまりこの世の全体を支配する力を与えられているという、一連の神話の中で、天皇支配の由来を説明するものとなっている訳です。

そこで、何故、天孫降臨が日向であったのかということに関して見ておきます。隼人の服属を説くための海幸山幸神話の中で山幸彦は天皇家の祖先、海幸彦は隼人の祖先であり、兄弟でもあるのですから、これは同じ場所に生まれなければならない。そうなると生まれる場所は、隼人の住む場所と天皇の支配する場所が隣あったところ、まさしく日向でなけ

ればならないということです。このように天孫降臨の地が日向に求められるということは、隼人の支配と密接に関わるのではないかとされています。

そうしますと天皇の祖は今の日向にいなければならない。一方、現実の政治の中心はヤマトにあります。そこで日向からヤマトに移動する必要がある。これが神武天皇の「東遷」というわけです。津田左右吉という学者が、大正から昭和にかけて『古事記』、『日本書紀』の科学的な研究の基礎を作り、今述べたような内容の明らかにしています。

2　伝承の中の日向

地図２（永山 2009　第６章第６節）

地図１（宮崎県史 通史編 古代２）

続きまして、熊襲の話に入りたいと思います。熊襲征討について、『古事記』ではヤマトタケルの一回、『日本書紀』では景行天皇とヤマトタケルによって二回、熊襲征討が行われることになっています。『日本書紀』では、景行天皇が熊襲を倒すために日向にやって来る、そして高屋宮という所に仮宮を造り、そこでミハカシヒメを后としてトヨクニワケノミコを産んだという内容が展開されています。地図１は『日本書紀』における景行天皇が九州に入り、九州を回って都に戻るという内容を表したルートです。地図２は、平安時代に書かれた「延喜式」という法律書に出てくる古代の駅と官道を表したものです。政府が作った古代のハイウェイが、このような場所を走っていたということになります。景行天皇の巡幸ルートは、南九州で分かれる中の内側のルートと一致します。外側のルートは薩摩国と大隅国ができた後に、その国の役所を結ぶために新たに作られたルートでしょうから、それ以前のものであるということは確かです。しかし、これも津田左右吉によれば、そもそも大王・天皇が九州に出かけたのはいつかと考えると、前述の六六三年の白村江の戦いで、ヤマトが唐・新羅の連合軍と戦って敗れますが、その直前に行われた斉明天皇による陣頭指揮のための行幸が天皇が九州にやって来た最初であろうとされています。天皇自ら九州に出かけて敵を倒すという話は、斉明天皇の筑紫行幸以降でないと構想できないのではないかということであり、景行天皇の巡幸というのもやはり七世紀の後半頃にできた話ではないかと、津田は言っています。

ただし、『古事記』や『日本書紀』に日向出身のたくさんの后の名前が挙がっています。『古事記』を見ますと、『古事記』全体では天皇の后になった人や、天皇に召し上げられたとされる者が八十五人います。その中で近畿以外の人と考えられるのが二十一名います。その出身地を見ていきますと、尾張（愛知）二人、丹波（京都）一人、紀伊（和歌山）一人、丹後（京都）三人、吉備（岡山）二人、美濃（岐阜）一人、播磨（兵庫）一人、近江（滋賀）五人、伊勢（三重）二人、日向が三人となり、二十一人の内、日向の三人を除くと岡山から岐阜あたりの間、つまり都の近くに固まっているわけです。ところが飛び離れて九州の日向に三人ということになっている。しかも、この日向から入った后が産んだ子どもたちは皇位継承問題に密接に関わっており、このあたりの内容は日向の后がそれなりに重要な役割を果たした、という事実を反映しているのであろう、ということが考えられます。それから見ますと、九州で一番大きな前方

後円墳が日向にあり、大きさの上位五～六つの古墳の中で、一つだけ福岡県の八女にある岩戸山古墳以外、すべて広義での日向国、現在の宮崎県～鹿児島県大隅半島志布志湾沿岸に固まっているというわけで、この地域とヤマトとの密接な関係がカミナガヒメをはじめとする日向出身の后の話にも反映されているであろうと考えています。

（休憩の後、後半へ）

3　江戸時代の日向と神話

江戸時代の日向と神話について話をしたいと思います。先ほど申し上げました『古事記』と『日本書紀』について、江戸時代に入る前までは、『日本書紀』が圧倒的に重要視されています。これは神道という宗教の一種のバイブルのような役割を果たしていたからです。『古事記』はその補助的な使われ方をしていたのですが、江戸時代に入りますと様相が変わります。それは本居宣長という人物が『古事記』の重要性を非常に高く評価するようになったからです。宣長の学問は、「文学説、語学説、古道説」という三つのスタンスをもっていたようです。文学説とはいわゆる「物のあはれ」を知るということ、語学説とは古い時代の物語を理解するための古語を実証的に研究していくということ、古道説とは日本の古い姿、仏教や儒教といった中国の文化に染まる前の日本固有の姿を突き詰めていく、ということです。その考え方から、最初に申し上げたように中国の様々な書物を借りて書かれた『日本書紀』よりは、日本の言葉をそのまま著した『古事記』の方が大切である、という考えのもと、『古事記伝』という『古事記』に関するきわめて詳細な注釈書を作ることになります。

本居宣長の私塾である鈴屋に日向出身の者が三名入塾していますのでこれについて、簡単に紹介しておきます。いずれも高岡の人です。高岡は薩摩藩領ですが、薩摩藩全体でも鈴屋に入塾し弟子になったのは三名しかいません。弟子といっても、伊勢松坂の鈴屋に行って直接に学んでいるわけではなくて、今で言う通信添削で学んでいたようです。ちょうど三人が弟子になった時は、『古事記伝』が完成した直後のようでして、その頃宣長は弟子たちに『古事記』に出てくる三一四の神々を一柱ずつ割り当ててそれに関する歌を詠ませています。この三人にはスクナヒコノカミ、コノハナサクヤヒメ、コトシロヌシノカミが割り当てられて、その歌が残っています。

この三人の中で横山尚謙は、本庄（国富町）で寛政元年に発掘された猪塚（いのつか）という古墳の出土品の同定に関わっている人物です。この人は京都に医学の修行に行ったときに石も薬に使うのか、色々な石を見て回った際に、「八坂瓊之曲玉（やさかにのまがたま）」を見て、この古墳で出土した物もその時見た曲玉に違いないということで、「曲玉」という名を同定したのです。（画像を提示しながら）この猪塚については数年前、西都原考古博物館で展示されたものですが、出土の状況や出土品などを非常に精緻に図面化した資料が残っておりまして、これらによってその詳細が分かります。

（画像を提示）これは、明治に入って本庄の剣ノ塚稲荷の神官である宮永真琴という人物が、本庄にある古墳を描かせたものの一部で、諸々の遺物が出土した猪塚という古墳を描いたものですが、墳丘の右前に小さな石塔のような物が描かれています。現在も猪塚の横にこの石塔が立っておりますのでこの古墳に間違いないということになります。この猪塚について、薩摩藩の国学者に白尾国柱（しらおくにはしら）という人物がいますが、彼は、大変貴重なものが多く出土しているこの古墳には誰が葬られているのかということについて考え、『日向古墳備考』『麑藩名勝考（げいはんめいしょこう）』を著しています。この古墳は、神武天皇の兄の墓であり、神武天皇とともに東遷していく兄の稲飯命（いなひのみこと）に関して記紀には「海に入った」という表現があるが、海で亡くなったのではなく、日向に戻りこの古墳に埋葬されたのではないかということを書いております。

当時としては古墳の発掘は大変珍しいことで、今ですと猪塚で出土する物は宮崎県内でも何カ所かで見られますが、当時としては極めて珍しい物であったということで、その由来を神武天皇の兄弟と結びつけて考えようとしていたようです。現在の西都市三宅村の庄屋を務めた児玉実満（じつまん）も、一九世紀に入る前に諸々の史跡などを調べ、神話と結びつけながら色々な考察をしています。資料に『笠狭大略記（かささたいりゃくき）』をあげておりますが、「時に此の帝都の地に於いては、帝宅邑と称したりと、之即ち帝宅なり、而るに亦帝の文字を憚（はばか）り懼（おそ）れて今三宅の文字を用ゆとなり、・・」と記し、景行天皇がきたところが宮家（三宅）となり、今西都にあるのだ、ということで西都にある地名と神話や伝承と結びつけて理解しようとしています。

4　近代の宮崎県と記紀神話

続きまして、本日の内容のもう一つの柱である近代について見ていきます。まず戦前期の宮崎県と神話です。明治期の段階においては、よく分からない部分もありますが、宮内庁書陵部に『日向三山陵建白書類集』という冊子が残されています。これは『宮崎県史』を編纂する際に、宮内庁で日向関係のものを集めたものを見せていただいたのですが、明治二十一年頃にまとめられ、大正十四年に宮崎市の竹下雄一郎という人物の自宅で写したと記されています。それによりますと、明治十一年あたりから明治二十年くらいの間のもの、中でも明治十四～十六年位の時期のものが中心になっているのですが、この時期には宮崎県はありません。宮崎県は明治九年にいったん鹿児島県の一部に編入されます。そして、明治十六年の五月九日に、再び宮崎県ができるのですが、ちょうどその分県運動を展開している時期に、建白書の差出人は、日向の山陵を何とかして欲しいということを陳情しようとしていたわけです。それは何故かというと、ニニギノミコトとホデリノミコト、ウガヤフキアヘズノミコトの陵墓を三山陵というのですが、

	日付	名称	差し出し者（著者）	宛先	内容	備考
①	明治十一年七月	日向可愛山陵取調書	宮永真琴	白野真雲	女狭穂塚＝木花開耶姫 男狭穂塚＝可愛山陵	三宅神社祠掌井上義水謹書
②	明治十四年二月八日	郡役所・戸長役場へ達	鹿児島県令渡辺千秋代理鹿児島県少書記官上村行徳	郡役所・戸長役場	五月三十日迄に届け出を求める	
③	明治十四年一月十九日	乙第一号（皇子墓・地方伝説の取調）	宮内卿徳大寺実則	沖縄県を除く府県	諸王にて奉祀の墓を皇子の墓に準じて取扱	
④	明治十六年九月廿日	書類御下渡願	日高善太郎・竹下雄一郎	宮崎県令田辺輝実	建白書一通・日向三陵考一冊・高屋山陵図一葉の返却を求め、この差し替え分同日に提出	
⑤	明治十六年九月廿日	鹿第五号　別紙下渡	宮崎県令田辺輝実		④の下渡を実施	
⑥	明治十六年五月	児玉某建白	鹿児島県平民児玉多次郎	内務省寺社局長 宮内省御陵墓掛	丘陵御調の令 実満神社の号の許可	児玉実満は児玉多次郎の祖父
⑦	明治二十一年六月一日	日向三山陵発見実地御査察願（控）	日高善太郎・竹下雄一郎	内務大臣山県有朋 宮内大臣土方久元		此分未得達案
⑧	明治十五年一月	汝告国民	竹下雄一郎		薩摩・大隅分出後の延喜式に、三陵は日向国に在りと見える	是、表白新聞紙時之勝
⑨	明治二十七年四月	（御巡回二就キ一書ヲ呈出）	日高善太郎・竹下雄一郎	諸陵介藤田儼	三宅に笠狭之宮＝三宅神社 木花開耶姫＝都萬神社 三陵志・神代図を添付	
⑩		都萬神社由緒抄記				由緒は明治七八年頃、政府ニテ神名帳編纂ノ節旧宮崎県ヨリ差出セシモノナリ
⑪	（明治十六年）十月十六日	書状	平山太郎	竹下雄一郎	建白草案・取調書類を見ての感想等。児玉実満説を評価。	
⑫		日向旧元集後書				
⑬	嘉永五年如月上旬	日向三山陵考略	本部定敏			
⑭	明治十六年八月六日	⑬の考証	竹下雄一郎			

日向三山陵建白書類集

明治時代に入ると明治政府の中枢に薩摩藩出身者が入り、この三山陵をすべて鹿児島県に持っていってしまったのです。宮崎県も本体がなくなり、鹿児島県の一部になってしまう。宮崎県を分置しようとする動きとリンクする形で、宮崎にある陵墓を調査してもらおうという運動を展開していく事になります。

西都原古墳群の発掘調査が今年で一〇〇年目となりますが、この調査を最初に企画したのが、当時の知事有吉忠一です。彼が書いた報告書の序文に「我日向国ハ皇祖発祥ノ霊地ニシテ神代鴻業ノ遺跡至ル處ニ現存シ・・」とあり、日向国は皇祖発祥の霊地であるようなことを述べています。そこで調査が六次にわたって行われます。しかし、有吉知事が目指した事は結局うやむやな形で終わってしまいました。というのは掘っていくうちに天皇との直接的な関係が疑われるような状況が見えてきたからです。考古学史を書いた勅使河原彰氏は、「この調査は有吉の目的はともあれ、古墳群を始めて計画的に調査し、とりわけ調査の結果、古墳群の年代が当初の予定より新しいことが明らかになり、『記』『紀』の伝承を発掘によって実証しようとした有吉の目論見が失敗に終わった」と述べ、しかし、それによってかえって「考古学者に『記』『紀』の伝承に懐疑の念を抱かせるきっかけを作った。」と書いています。最初から信じ込んでいれば学問の発展はないわけですから、そういう意味では考古学にとってはむしろ幸いしたという事なのかもしれません。

とにかく発掘は行われ、有吉は『日向国史』も編纂しようと考えます。そして大正二年にその事業を喜田貞吉に委嘱します。『日向国史』が出版されるのは昭和四年になるのですが、その中で喜田は「言ふまでもなく日向は神祖発祥の聖地としてその古代史は実に我が日本帝国に建設史、日本民族の成立史とも謂ふべく普通の地方史をもって目すべからず」と述べ、日向国史は日本国の歴史そのものであるという言い方をしています。『日向国史』の目次を見ていくだけでも、神話の中身をそのまま説明している部分もたくさんあることがわかります。

また、昭和八年、宮崎市において「祖国日向産業博覧会」が開かれています。ここで、「日向」の頭に「祖国」という言葉が使われるようになっています。その博覧会に向けて、当時の宮崎中学校校長であった日高重孝が著した『伝説の日向』という書物がありますが、この目次を見ますと、神話が全面的に展開されている訳です。その翌年に、昭和八年度の宮崎県の統計資料が出されるのですが、その名前は『祖国日向の展望』といい、これもタイトルに冒頭に「祖国」という文字がついています。その中の「沿革」の上古のところを見てみると、ここでも神話の中身がそのまま反映されています。

続きましてその二年後の昭和一〇年、昭和天皇が初めて宮崎にやって来ます。陸軍大演習のために都城などを訪れますが、それに合わせて宮崎県と鹿児島県行幸がなされたのです。一九三五年の一一月一四日、午後四時過ぎから天皇の御前講演が行われ、宮崎中学校校長であった日高重孝が「古代日向史蹟に就て」という題で講演を行っています。宮崎の蓮ヶ池にあります「みやざき歴史資料館」に、この講演の下書き原稿が寄贈されています。その内容は先ほど御紹介した祖国日向博覧会の解説書の内容とほぼ一致している訳ですが、御前講演で天皇に対して説明するわけですから、これは当時の公式見解と言ってよいと思います。講演は、神話その他の内容と、地元の言い伝えを直結させて諸々の説明をしています。後に県議会議長になります川越石男の回想録に、「御前講演で橘の小戸の阿波岐原の事があったので、すぐに侍従武官長の本庄繁大将が、その場所に行ってみたい、と言い出したので、私が車で案内した。」という話があります。ちなみにこの時、都城の大本営と鹿児島でも御前講演が行われています。都城大本営における講演は「吉野朝における肝付兼重の勤王事績」、「戦国時代を中心とする薩摩藩の士風について」で、これは演習中に行われたものです。鹿児島の方で行われた講演は「維新前後における鹿児島出身功臣に就て」という演題で、

こちらは南北朝以降の主に薩摩藩関係の人々が扱われており、宮崎が神話を中心にアピールをしていたのと対照的です。

一九三五年になりますと、五年後の紀元二六〇〇年に向けて国レベルの聖蹟調査委員会がつくられ、神武天皇や三山陵に関する聖蹟を調査しようという動きが始まります。しかし一九四〇年に「・・今日聖蹟ノ箇所ヲ決定シ難キモノト認メ・・」というううやむやな結論を出しており、これは、千田稔氏によれば、同時期に宮崎県同様に鹿児島県も猛アピールしていたため、県の対立を避けようとしてうやむやな決着にしたのではないか、ということです。

ちょうどその頃、相川勝六が本県知事に就任し、日中全面戦争勃発をうけての国民精神総動員運動に呼応して「祖国振興隊」を結成していきます。その理念は、「皇祖発祥ノ聖地ニ生レ天業翼賛ノ裔タルニ感激シ神恩報謝ノ精神ヲ以テ勤労ヲ倍加シ県勢ノ振興ヲ期スル」というもので、皇祖発祥の地に生まれたことに感謝して頑張ろうという目的で結成されました。その一方で紀元二六〇〇年に向けて諸々の事業を行っていく訳ですが、そこで、「八紘之基柱」を造ろうという動きが出てきます。相川知事が県議会で述べた内容ですが、「・・日本の八紘一宇の皇威の及ぶところから石を一つ集めて、石がなければ土でも良い、そうしてその一つの建設物の材料にする・・」ということで、石材を得る場所も「朝鮮、樺太、台湾、満州、中支、シンガポール、香港、アメリカ・・」とあり、全世界から石を集めて八紘一宇の塔を造ろうではないか、ということを言っております。塔は一九四〇年の一一月に竣工しますが、主に祖国振興隊の労働作業によって造られたと言われています。

さらに同じ頃、「おきよ丸」という船が造られて美々津から大阪まで航海をしています。これは当時の大阪毎日新聞との連係によるものですが、（画像提示）尾道の写真ライブラリーに当時、尾道に到着したおきよ丸の写真があります。祖国振興隊でも、「万歳三唱」にかわり「起きよ三唱」を実施します。そして、神武天皇が美々津から出航したという話を県民運動の大きな柱の一つとする動きがあり、美々津は海軍発祥の地となります。「日本海軍発祥之地」という首相米内光政による揮毫を掲げた記念碑が一九四二年に建設されています。

次に高千穂峰県境問題について、川越石男の回想録の記述を紹介します。（昭和一五年の地図を提示現在の県境を示しながら、）、どういう訳か鹿児島県の県境が宮崎県側に入り組んだ形になっているため、諸々の証拠を揃えて、当時地図を作成していた陸軍省へ直接訂正の申し出たということです。その時の陸軍の対応について、次のように記述しています。「色々説明を聞いて、或はそのような誤謬が起きているかも知れない。よく分ったが、今我国は世界の国境を換えようとしている。この場合、宮崎県と鹿児島県との県境に違いがあるとしても、そんな事に今はかまっていられない。」県境くらいでガタガタ言うな、という対応で一言も言い返せなかった、と言うことです。

川越石男 1978 より

それから今回是非ご紹介したいのは、「戦ふ少国民」という映画です。これは軍人援護教育の中で計画され、製作された映画で、全部で五本

ほどあるのですが、その内、「農村編」は鹿児島県喜入町前之浜国民学校を舞台にしたドキュメンタリーとして撮られています。また、都会編は、横浜市の西前国民学校で撮られます。教育史に関する勉強会の中で四〇分ほどの都会編の映像を見ておりますと、終わり近くに突然、八紘一宇の塔の映像が出てきたのです。これは昭和一九年、国民学校・中学校の生徒たちを集めて映像を撮り、それぞれの各編映像の最後に繋げたようです。映像は当時の様子を理解する上で大変興味深いものですのでご覧いただこうと思います。

（五分間程のＤＶＤ画像を映写、八紘一宇の塔の前で祖国振興隊が整列、「少国民闘魂起戦捷祈願大会」の模様）

「戦ふ少国民」は、軍人援護教育の一環として傷痍軍人や留守家族などを援助し、それを少国民から教育していくという流れの中で作られていく映画ですが、そこで八紘一宇の塔を積極的に利用していこうとしている訳です。八紘一宇の塔は昭和一九年十銭札にも使われています。そして、この塔自体が戦争遂行へも利用されていく訳です。

戦前の神話の一般的なとらえ方としましては、神話をほぼ歴史的事実であるととらえています。それは天皇制支配の根拠となっており日本の膨張政策を支える役割となっているということであります。神話を歴史的事実としてとらえているということに関連して、一九一一年頃に政府を巻き込んでの南北朝正閏論争がありました。その時の文部省のコメントで、歴史には三つあるというものがあります。それは、学者の研究対象としての歴史、庶民が芝居など娯楽を通して楽しむ歴史、文部省が教則で定める歴史、ということです。それぞれは全くの別物であると言って良いかと思いますが、その中で少なくとも一九三八年に初版される文部省教学局が編集した『教学叢書』によりますと、「神話とは国家における非常に重要な根本義を表すものである・・」と神話を極めて重要なものとして位置づけています。結果、先出の津田左右吉のように、神話伝承を科学的に理解しようとした者は告発され、著作が発禁となり早稲田大学の教授を辞任させられたり、著作の出版元である岩波書店の岩波茂雄は出版法違反により有罪判決を受けるという事で、神話を科学的にとらえていこうという動きは段々押さえ込まれていくという状況が出てきます。

5　日本神話のとらえ方

その後日本は戦争に敗れ、占領されていくわけですが、その中で神話についての見方も大きく転換していきます。例えば八紘一宇の塔（八紘之基柱）から「八紘一宇」の文字や武人像が取り払われていきます。宮崎県はというと、「日のイデオロギー」という言葉を使った研究者もいましたが、「祖国日向」「日ののぼる所」という日本の聖地というイメージから「南国宮崎」というイメージへと転換していく。「祖国日向」から「太陽と緑の国」というイメージへ転換していくことで、神話のイメージはある意味薄れていくということになります。

さて、現在の神話のとらえ方についてご紹介しておきますが、まず、比較神話学的なとらえ方があります。ここでは、「死の起源説話」を挙げました。これは、海幸・山幸神話の直前に出てくるホノニニギノミコトがコノハナサクヤヒメと結婚する直前の話ですが、オオヤマヅミの所に結婚の承諾をもらいに行くと、オオヤマヅミは、姉のイワナガヒメも一緒にもらうように言います。ところがイワナガヒメは容姿が良くなかったようで、ホノニニギはその申し出を断るわけですが、それを受けて、オオヤマヅミはイワナガヒメと結婚すれば石のように永遠の命を貰えたのに、これを断ってコノハナサクヤヒメと結婚したので、命は花のようにはかなくなるであろう、つまり花が散るようにはかなく最後を迎えるであろう、と言います。これを死の起源説話と言います。インドネシアのトラジャ族の伝承にも同じような内容があります。日本の神話がイワナガヒメとコノハナサクヤヒメを石と花に例えているのに対して、ここでは石とバナナになっています。「神が地上に石を下ろしたが、石は食

えないと言うとバナナが天からもたらされた、したがって、バナナのように生命ははかなくなるであろう。バナナの木が子どもを持つときに、親の木は死んでしまうであろう。」という、設定は違えど日本の神話と同じような内容を伝えています。

また海幸山幸神話の構成要素には失われた釣り針がありますが、これもインドネシアに設定が兄弟ではありませんが、友人同士ということで同じように釣り針を亡くして探しに行くという話があります。これについては文化人類学者の大林太良氏による地図をみますと、海幸山幸神話の要素は、日本のみにあるということではなく、太平洋を取り囲むように各地に点在している話の中の一つであるという理解をすべきであるという立場があります。

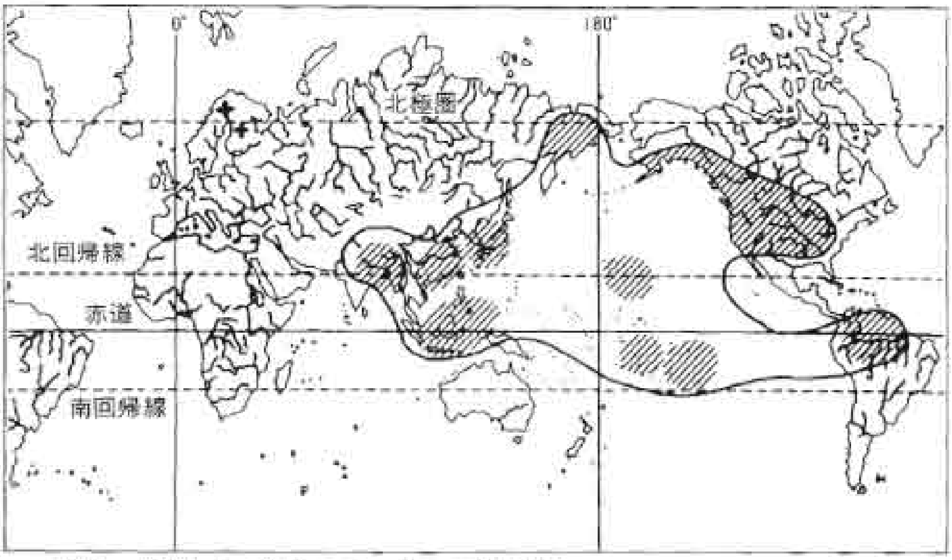

図３　「失われた釣針モチーフ」説話分布図
（大林太良『日本神話の起源』角川書店より転載）

次に神話と民俗を結びつけて考える立場でありますが、幕末に奄美諸島で書かれました『南島雑話』には、囲炉裏端に、赤ん坊を抱いた女性が横たわっている挿図があります。これはマザーロースティングといい、出産直後の女性が火で体を温めるということで、コノハナサクヤヒメの火中出産に繋がっているのではないかと言われています。現実にある様々な民俗事象を神話の事象と繋げて考えていこうという立場であります。

二つ目は発展段階論的なとらえ方です。これはよく話に尾ひれがつくと言いますが、話というものは単純な話に尾ひれがついて段々と複雑になっていく、ということから、神話も単純なお話が段々と複雑になっていくのではないか、ということです。表は、天孫降臨の段についてのものです。『日本書紀』の中には本文があり、それ以外に異伝があります。何種類もの異伝があるのですが、天孫降臨の部分について、その異伝及び『古事記』とその内容を分類していく中で、例えば誰が降臨を指令したか、だれが降臨したか、降臨する際の姿、降臨した場所、それに付き従う神々、そしてその際に神器の授与があったかどうか、さらに統治の神勅があったか、というような点で内容を表にまとめていくと、単純な話に色々な話が付け加えられていって段々と複雑な話

天孫降臨の段の異伝

異伝＼要素	降臨を司令する神	降臨する神	降臨神の容姿	降臨地	随伴する神々	神器の授与	統治の神勅
『日本書紀』本文	タカミムスヒ	ホノニニギ	真床追衾に包まれた嬰児	日向襲高千穂峯			
同、第六ノ一書	タカミムスヒ	ホノニニギ	真床追衾に包まれた嬰児	日向襲高千穂添山峯			
同、第四ノ一書	タカミムスヒ	ホノニニギ	真床追衾に包まれた嬰児	日向襲高千穂槵日二上峯	アマノオシヒ・アマツクメ		
同、第二ノ一書	タカミムスヒとアマテラス	アメノオシホミミ→ニニギにかわる	虚空で出産した嬰児	日向槵日高千穂峯	アマノコヤネ・フトダマ・諸部神	神鏡の授与	
『古事記』	タカギノカミとアマテラス	アメノオシホミミ→ニニギにかわる	降臨の際には特別の容姿記載なし	日向高千穂久士布流多気	五伴緒（アメノコヤネ・フトダマ・アメノウズメ・イシコリドメ・タマノオヤ）・オモイカネ・タヂカラオ・アメノイワトワケ・アメノオシヒ・アマツクメ	三種神器の授与	葦原の国統治の神勅
『日本書紀』第一ノ一書	アマテラス	アメノオシホミミ→ニニギにかわる	降臨の際には容姿記載なし	日向高千穂槵触峯	五部神（アマノコヤネ・フトダマ・アメノウズメ・イシコリドメ・タマノヤ）	三種神器の授与	統治の天壌無窮の神勅

三品彰英 1964

に変化していったのではないか、このように神話とは元々の古い姿があったのであろうが、それに尾ひれがついて、内容が徐々に発展していく＝発展段階論的とらえ方がなされています。これはヤマト政権がどのようにまとまっていくのか、ということと関わっていくという内容につながっていきます。

続いて祭儀論ですが、神話とは当時朝廷で行われていた諸々の祭りの根拠を示すものであるという考え方があります。例えば天孫降臨神話の中でホノニニギノミコトが真床覆衾（まとこのおふすま）にくるまって天上世界から降りてくる、とありますが、実はこれは大嘗祭の時に天皇が布団のようなものにくるまる、ということを説明しているのだということで、神話の中身には奈良時代や平安時代に実際に行われる儀式の由緒の在処を、神話と対応させているのではないか、と言う考え方です。

そして、現在最も支持されている考え方で、多元的神話論というものです。神話とは元々一つではなく、色々なパターンがあり得たのだということです。例えば先述しましたが「黄泉の国」の話は、『古事記』にはあるが『日本書紀』にはありません。これは発展云々ということではなく、元々の構想が違うというもので、言い換えれば神話自体に様々な種類があり得たという考え方です。そして、元々様々な種類があった神話をベースにして、『古事記』や『日本書紀』にまとめるという作業が行われ、その際に取捨選択が行われる訳ですが、それはまとめる時点での政治状況、まさに七世紀末から八世紀初頭の政治の動きが密接に関わって、今の神話の姿にまとめられたのであろうということです。

おわりに

最後に、神話についてどう考えるべきかということです。『宮崎県史　通史編　古代2』において、私が神話の部分を担当したのですが、戦前より、東京帝国大学を卒業後、宮崎に赴任されて神話について深く研究されていた柳宏吉先生がいらっしゃいました。柳先生が『宮崎県史』においても神話の部分を書かれる筈でした。柳先生は『宮崎県史　別編　神話伝承編』という史料集には関わられたのですが、その後亡くなられ、通史編は私が担当することになりました。そこで当時公表されていた諸々の神話研究を調べまして、最後のまとめとして次の文を書きました。それを読み上げまして本日のお話を終わりたいと思います。神話と現代という内容です。

今まで見てきたように、日本の神話は、そのもとになった伝承や説話の存在を想定することが不可能ではないものの、神話としての総体は、律令体制が完成される時期に並行して、天皇を中心とする国家支配を根拠づける目的を持って編集されたきわめて政治性を帯びた内容を持っていた。

日本は、明治維新によって天皇を中心とする国家体制をつくりあげ、一九世紀末以降、積極的にアジア地域への膨張政策を採り、ついには第二次世界大戦で連合国と戦火を交え、敗北することになるが、その際、『古事記』、『日本書紀』の神話などが政治的に利用された事実があった。

「神話のふるさと」とされる宮崎県の歴史を考える場合、神話のもつ文学性を評価し、古代人の息吹に触れ、郷土への想いを育むことはもちろん重要であるが、その一方で、特に近代史において神話が果たした役割に関しても十分に理解しておく必要がある。

宮崎県では民話などの民間伝承や、神楽などの芸能に、神話に基づいたものが数多く存在しており、先人たちはこれを今まで守り続けてきました。これは極めて重要な事ですが、併せて神話が果たしてきた役割についても頭の隅に入れておいていただければと思います。以上で本日の話を終わらせていただきます。御清聴ありがとうございました。

主要参考文献

川越石男　一九七八『政と生』（私家版）

君塚仁彦編著　二〇〇六『東アジア教育文化研究シリーズ1　平和概念の再検討と戦争遺跡』（明石書店）

黒尾和久　二〇〇六「『祖国日向』と考古学研究1「好古家・考古学者」日高重孝・石川恒太郎の歴史認識」（君塚二〇〇六所収）

神野志隆光編　一九九九『古事記の現在』（上代文学会研究叢書　笠間書院）

小馬徹　二〇〇二「ニッポン　オキヨ！　昭和「神武の舟」大坂へ」（『日向市史別編　日向写真帖　家族の数だけ歴史がある』日向市）

小馬徹　二〇〇五「光満つ夢のまにまに1　日向精神誌試論」（日向市史民俗編『日向1　光満ちるくにの生活誌』）

細間正之　一九九一「海宮訪問」と『経律異相』（『古事記年報』三三）

瀬間正之　一九九四「『経律異相』の成立と受容」（『記紀の文字表記と漢訳仏典』おうふう）

千田稔　一九九九『高千穂幻想　「国家」を背負った風景』（PHP新書　PHP研究所）

津田左右吉　一九四八『日本古典の研究』（岩波書店）

勅使河原彰　一九八八『日本考古学史　年表と解説』（UP考古学選書1　東京大学出版会）

中村明蘐　一九九三「隼人の名義について」（『隼人と律令国家』名著出版）

中村明蘐　二〇〇〇『神になった隼人1　日向神話の誕生と再生』（南日本新聞社）

永山修一　一九九八「日向神話」（宮崎県『宮崎県史　通史編　古代2』）

永山修一　二〇〇九『隼人と古代日本』（同成社）

西川誠　一九九九「太陽と緑の国」（『宮崎県の歴史』山川出版社）

「平和の塔」の史実を考える会編　一九九五『石の証言1　みやざき「平和の塔」を探る』（本多企画　君塚二〇〇六に復刻）

前田一男　一九九七「映画『戦ふ少国民』関係資料」（野間教育研究所　戦時下教育資料2『資料　軍人援護教育』）

三品彰英　一九六四「日本神話論」（岩波講座『日本歴史』第一三巻　岩波書店）

水林彪　一九九一『記紀神話と王権の祭り』（岩波書店）

桜木稔朗　二〇一〇「二つの「二千六百年」」（『日向市史　通史編』）

森岡真人　二〇〇〇「国民総動員と県民生活」（宮崎県『宮崎県史　通史編　近・現代2』）

吉井巌　一九七八「日向神話」（『国文学』第二三巻一四号　一一月号　学燈社）